

ポストB R I C s の一角として注目されるアルゼンチン

～ 経済危機を脱してI M F に対する債務の全額を返済～

2006年5月21日(日)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

～ 要 旨 ～

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

アルゼンチン経済は、2003年以降急回復しており、2005年の実質GDPは前年比+9.2%と、2004年の同+9.0%からさらに加速した。アルゼンチンでは、2001年末に政府が1400億ドルにのぼる対外債務の支払い停止(デフォルト)を宣言し、経済危機が顕在化した。アルゼンチンはIMFの金融支援を仰ぐとともに、IMFの要求に従うかたちで2002年から為替制度を変動相場制へと変更した。通貨ペソがドルに対して急落した結果、輸出が競争力を取り戻し、それが2003年以降の景気回復へとつながった。

輸出は為替レートが安定的に推移するなか、メルコスール向けを中心に好調を維持しており、2006年入り後も前年比2桁の伸びとなっている。外需主導の景気回復は、個人消費や設備投資といった内需にも波及しつつある。とくに雇用・所得環境の改善を受けて、個人消費の回復傾向が鮮明だ。サッカー大国であるアルゼンチンが2006年6月のドイツ・ワールドカップで好成績を残せば、国民のマインドが好転して、個人消費が一段と盛り上がる可能性もある。

マクロ経済の好調を反映して、株式市場も活況を呈している。ブエノスアイレス証券取引所の代表的な株価指数であるメルバル指数は上昇傾向を強めており、足元では600を超える水準で推移している。

懸念材料は通貨ペソの下落に伴うインフレの加速である。2006年1月、アルゼンチンは96億ドルに上っていたIMF(国際通貨基金)に対する債務の全額返済に踏み切った。これにより今後、アルゼンチンは、IMFの干渉を受けることなく自由な政策運営をしていくことが可能になる。ただし、債務返済に外貨準備高の約3分の1を使ったため、中央銀行は外貨準備の減少分を補うことを目的に大量のドル買いを行っている。この結果、通貨ペソには相当の下落圧力がかかるようになった。国内景気の過熱とペソ下落による輸入物価の上昇が重なれば、インフレの問題が表面化する恐れがある。中央銀行は金融引き締め政策によってインフレの抑制を図っているが、すでにインフレーションは加速しつつあり、2006年4月の消費者物価指数は前年比+11.6%に達した。インフレを抑制することが、政策当局にとって喫緊の課題となっている。